「半芸術」復権の軌跡と砦としての美術館
「もうひとつの日本美術史――近現代版画の名作2020」展

福島県立美術館 2020.7.11–2020.8.30／和歌山県立近代美術館 2020.9.19–2020.11.23

栗田秀法

> 板画は、どちらかと言えば、日本では不遇な立場に置かれてありました。恩地孝四郎氏が、あれ程、身を尽くして、板画に体を割いたにもかかわらず、政府は何の沙汰も無かった程薄情でした。
>
> （『KBS 会報』20号（1956））

第28回ヴェネツィア・ビエンナーレ（1956）で版画大賞を受賞した際の言葉において、「半画」とも揶揄されていた版画に対する国内的な評価がいかに低かったかについて、棟方志功（1903–1974）は上のように述べた。

敗戦後の日本において日本の版画家たちを高く評価したのは、ウィリアム・ハートネットやオリヴァー・スタットラーらのGHQ関係者とその周辺のアメリカ人収集家であり、その間をつなぐ要の位置を占めていたのが恩地孝四郎（1891–1955）であった。その後1950年代に入ると、ルガーノやサンパウロの国際版画展で棟方、斎藤清（1907–1997）、浜田知明（1917–2018）、駒井哲郎（1920–1976）が高い評価を獲得し始めていたのだが、棟方のヴェネツィアでの大賞受賞はわが国における版画への関心や評価を一気に高めるものであった。とはいえ、本展図録の「ごあいさつ」にあるように東京オリンピック開催時に開催された「近代日本の名作」（国立近代美術館）では版画の扱いは必ずしも大きなものにはならなかったのである。それはさておき、棟方の受賞の翌1957年には東京国際版画ビエンナーレ展が始まり、1979年までに11の回を重ね、後に1960年代、70年代は日本の現代版画の黄金時代とも称されることとなる。

近現代版画の学術的な調査・研究が本格化するのは1970年代半ばあたりのことである。それまでは、近現代版画史についての著作の多くは実制作者たちによって執筆されていたのに対し[1]、徐々にではあるが、国公立の学芸員の研究成果が展覧会や著作という形で公になり出したのである[2]。また、版画についての普及、頒布、評論、研究を行うべく、『季刊版画』（1968–1971、編集長：川合昭三）や『版画芸術』（1973–、初代編集長：室伏哲郎）などの版画専門雑誌が刊行され始めたことも忘れてはならない。

今回の展覧会「もうひとつの日本美術史――近現代版画の名作2020」は和歌山県立近代美術館の開館50周年を記念して福島県立美術館と連携しつつ両館で開催されたものである（筆者が観覧できたのは和歌山会場のみ）。近代美術館の収集の柱に、郷土作家、戦後美術に加え、近代・現代版画が加わったのには、日本を代表する版画家に数えられる田中恭吉（1892–1915）や浜口陽三（1909–2000）を郷土が輩出したことが大きい。「吉田政次遺作展」（1974）、「田中恭吉の芸術」（1977）といった郷土のゆかりの版画家の展覧会の開催を経て、1980年頃からは近代・現代版画の収集・紹介に力を入れ、「恩地孝四郎・田中恭吉・逸見享版画展」（1981）などをはじめとする版画関係の展覧会の開催に加え、「津高和一・泉茂・吉原英雄展」（1983）などに端を達する関西の美術家を集めた展覧会においても版画に取り組んだ作家がしばしば選ばれた。特筆されるのは、1985年から1993年までは「和歌山版画ビエンナーレ展」が5回にわたって開催されたことである。そうした活動の結果、そのコレクションが現在では国内でも屈指のものに成長していることでは衆目が一致しており、本展は美術館の50年の収集活動の成果を改めて広く世に問うものとなっている。

展覧会図録の巻頭エッセイには、和歌山県立近代美術館の学芸員第1号で福島県立美術館の名誉館長・酒井哲朗氏によってコレクション形成のあらましがまとめられるとともに、文章の末尾で歴代の学芸員の名が挙げられ、その功績が讃えられている。続く文章において現和歌山県立近代美術館長・山野英嗣氏は、1960年代から現在に至る「版画」のジャンルの評価の歴史を概観するとともに、恩地孝四郎に関連して、その初めての抽象作品《抒情『あかるい時』》（cat.no.3-16）》に対する霊感源として山田耕筰が持ち帰った『青騎士』誌所載のW.ブルリュークの一図版である可能性を提起している。

350点以上の作品で構成された本展の展示は、以下の10の章から構成されている。

1. 「版画」前夜――印刷のなかの美術
2. 版に向かう画家たち――『方寸』の時代
3. 自己を刻む――創作版画という青春
4. 日本の版画を求めて――新版画という挑戦
5. 自立する版画――日本創作版画協会のころ
6. 版画の東西――震災、都市、モダニズム
7. 社会のなかで――日本版画協会のころ
8. 版画の戦後――再生、そして世界へ
9. 版への問い――版画の「現代」
10. 版に託す――私、心、イメージ

全体は三つに分けられ、1章は序論的役割を果たし、2―7章は、4章の新版画を挟んで、創作版画の成立と展開を、8―10章は戦後版画の展開をコンパクトに跡付けるものとなっている。実のところ開国後から現代に至るまでのわが国の版画の歴史を実作品でたどる試みは意外にも初めてといってよいものである。類似した歴史的な視点で版画の歩みを跡付けた「版画・80年の軌跡」展（町田市立国際版画美術館、1996年）は、戦前の版画で終わるものであった。

版画とは、「印刷という間接的方法で表現する絵画の形式。本来は同一画像を複数得るためにくふうされたものだが、それぞれの技法の生み出す質感や効果のために制作されることも多く、また1点しか作品のできないモノタイプ版画monotype（油絵の具やインキでガラス板、金属板、石の板に図柄を描き、それに紙を伏せて刷り取ったもの）もある」（『ニッポニカ』）とされるように、版画には複数性と版表現の独自性、あるいはメディア性と芸術性という二面性が元々備わっている。フランスの王立絵画彫刻アカデミーに1663年の改組後に何人もの銅版画家が会員に迎え入れられたのは、版画を通じてアカデミーの会員の作品を流布することを目論んだコルベールの求めに応じてのことであり、まさしく印刷・広報・宣伝媒体としての版画の機能を見込んでのことだった。前述の「版画・80年の軌跡」展では、「伝統と革新が入り乱れ、新しい秩序が生まれようとしていたわが国の近代美術界において、創作版画運動のみに立脚した一方的な語りは、当時の一側面しか見ていないというのもまた事実ではないでしょうか」との問題意識から、「刷り絵（伝統から近代へ）」と「絵画としての版画」という二つの部門を対等に立てて展覧会を構成するという大胆な試みが行われたことは注目されよう。

本展の出品作品は大多数が和歌山県立近代美術館のもので構成されているが、福島県立美術館の作品に加え、構成上不可欠なものについては数か所の博物館・美術館、もしくは個人の所蔵品が加えられている。そうした中、第1章の「「版画」前夜――印刷のなかの美術」は、ほぼすべてが西宮K氏コレクションで構成されている点で異質である。今回の展示は2015年の特集展示「『版画』の明治―印刷と美術のはざまで」でまとめて展示されたもののエッセンスの紹介であるといえ、もっぱら芸術的な版画の収集に労力を傾注してきた県立近代美術館のコレクションの今後の課題を示すものでもある。

第5章会場風景（写真提供：和歌山県立近代美術館）

続く2章から7章が本展の骨格で、その原型は2010年に開催された「日本近代の青春　創作版画の名品」展（和歌山県立近代美術館／宇都宮美術館）に存する[3]。同展はごく一部の個人蔵作品を除き和歌山のコレクションで構成されており、前述した1981年の三人展の後も「恩地孝四郎：色と形の詩人」（1994）、「田中恭吉展」（2000）を組織するなど、近代美術館が創作版画の調査・研究に注いできた熱量の大きさを物語るものになっている。その後も「月映：Tsukuhaé」展を宇都宮美術館、愛知県美術館、東京ステーションギャラリーとともに2014年から翌年にかけて立ち上げて巡回させ、2016年には「恩地孝四郎展」を東京国立近代美術館とともに開催している。

今回の展覧会では、展覧会が扱う年代が広まったため作家選定を精選せざるを得なかったが、「創作版画の名品」展においてやや手薄だった竹久夢二や新版画については千葉市美術館の所蔵品を補い、銅版画についても西宮や青森のものを補うことで他との質量のバランスをとっている。また、「版画の「アナ」―ガリ版がつなぐ孔版画の歴史」（2011）、「謄写版の冒険　卓上印刷器からはじまったアート」（2013）、「特集　謄写印刷工房から―印刷と美術のはざまで」（2016）を開催してきたことの延長で、創作版画誌に加え『孔版』（cat.7-58）『謄写版』（cat.7-59）が加えられている。本展では戦後版画が取り扱われることもあり、北川民次（cat.7-45）や村井正誠（cat.7-22）の戦前の仕事が加えられていることに新味が感じられる。

創作版画出現以降の版画界の悲願は、半芸術が版の芸術として認知されるべく、官展に版画の出品が許されること、東京美術学校に版画の講座が開設されることであった。第1回内国勧業博覧会（1887年）では、版画が「美術」の部類の中の彫刻、書画に続く「剞劂（きけつ）」の出品区分に入れられていたものの、出品を絵画と彫刻のファインアートに限定した第1回文部省美術展覧会（1907年）では版画の出品は叶わず、絵画の区分に「創作版画」が付加されたのは、20年も後の第8回帝展（1927年）でのことであった。印刷と美術の微妙な関係については、和歌山の学芸担当の一人・植野比佐見が「版画が息づくところ―印刷と美術の「版画」とその周辺」という文章を寄せている。美術学校における版画教育の問題については、同じ和歌山の青木加苗が「版画の「学び」方―美術学校への道のり」で詳述している。興味深いのは、語りつくされてしまったのか、本展図録には創作版画を正面から論じたまとまった文章がないことである。今回の図録で和歌山の学芸員は「版画」について印刷機能を含めたやや広い見地から捉えており、学芸の世代交代にともない関心の所在が少しずつ拡がっていることがうかがわれる。

もちろん創作版画においても印刷可能な媒体であることを活かし、全国で数多くの創作版画誌が刊行されたことはよく知られており[4]、本展にも主要なものが出品されている。版画は官展への応募が難しかった一方、「頒芸術」として同人誌のように印刷・刊行することは比較的容易であったからである。また本展では、5章に戸張孤雁『創作版画と版画の作り方』（1922）を嚆矢とする版画の教則本が15冊ほど展示されたことも特筆される。版画の普及と教育に関わる「範芸術」としての版画の側面への関心は、

第9章会場風景（写真提供：和歌山県立近代美術館）

この側面に関連する二つのエッセイが収録されたことからもうかがえる[5]。

最後の8章から10章は戦後版画の展開に充てられている。現代版画の分野では、和歌山版画ビエンナーレ展以前には、「版画の4人展：井田照一・木村光佑・黒崎彰・船井裕」が開催されている。ビエンナーレ後では、2000年に「現代版画の軌跡：ゆめとめざめ」展が、2017年には「現代版画の展開」展が行われている。また、毎年作家やテーマを決めた版画の特集展示も重ねられており、2009年には「浜口陽三展：生誕100年記念」が開催された。これらの調査研究活動の積み重ねが後半のセクションの礎をなしている。

第8章では、戦後に次々にはじまった世界各地の版画コンクールで名を成した、池田満寿夫（1934–1997）らの版画家たち、抽象絵画の盛行に応答した山口源（1896–1976）らの木版画家たち、銅版画や石版画の世界で新しい視覚世界を切り開いた瑛九（1911–1960）、加納光於（1933– ）らの版画家たちの作品が集められている。現代版画の収穫というべき名品ぞろいで、見ごたえのある大変充実したセクションであった。本章以降では福島県立美術館からの出品作も増え、福島を代表する版画家・斎藤清についてのエッセイも添えられている（「斎藤清の初期作品について―同時代の作家との関わりから」（紺野朋子／福島県立美術館））。和歌山出身の清水武次郎（1915–1993）との関連から、謄写版の版画家が数名加えられていることも新鮮である。

第9章では1960年代後半から顕著になる版画の世界の地殻変動を示す作品が集められている。横尾忠則（1936– ）をはじめとするデザイナーの版画への進出にともなって印刷と美術との境界の問題が前景化したり、高松次郎（1936–1998）、李禹煥（1936– ）、井田照一（1941–2006）らによって版表現の意味が問い直されたり、木村秀樹（1948– ）や斎藤智（1936–2013）らによって写真映像の操作を通じて認識の意味を問いかける試みがなされたことなどに見いだされる「叛芸術」の動きが要領よくまとめられていた。さらに辰野登恵子（1950–2014）、小枝繁昭（1953– ）らの、美術館の時代に応答した版画のある種の会場芸術化、大型化を示す作品も集められた。ただし、和歌山会場では一部の作品が展示替えとなるなどの展示スペースの制約もあり、スクリーンプリントの拡がりによって版表現が多様な支持体に可能になったことから生起するインスタレーション化の傾きや版表現が版画の枠を超えていく「汎芸術」の動き[6]と並んで、小コレクター運動以降の版画出版等を通じて芸術を日常化する戦後の新たなる「頒芸術」の営み[7]についても割愛されざるを得なかったようである。

第10章は美術界のおけるジャンルの解体、版画の現代美術化のなかにあってもあくまで版画の枠の中で版表現の可能性を追求する個性的な作家の作品が集められている。この章に加えたくなるユニークな作家は枚挙にいとまがないが、おそらくは作家選定に大方に異論を唱えられることの少ない重要作家や夭折の作家が手堅く選ばれている。その中にあって東北地方で活動した綿版画の大宮政郎（1930– ）といったこだわりの作家が加えられていることは興味深い[8]。展覧会の締めくくりが切手をあしらった太田三郎（1950– ）のコピーによる作品であることは何かしら意味ありげである。そこには和歌山県立近代美術館の創作版画の美術館から「印刷と美術」の美術館への脱皮への意欲が密かに込められているのかもしれない。

博物館建設ブームの時代に開館した美術館が現在開館30年とか50年を迎えている。しかしながら、21世紀に入って以降は自治体の財政難もあり購入予算や事業費が激減し、公立美術館はその活動に行き詰まりを見せている。そのような状況下で各館の活動の頼みはバブル崩壊以前に文化的な社会資本として蓄積された各館なりのコレクションの厚みである。コレクションが歴史的、芸術的、学術的、鑑賞的、教育的等、多様な価値を有し、美術の枠組みも大きく変わってきているとすれば、コレクションを今後の多様な活用に開いていくことが求められている。その準備作業として、館のこれまでの活動の成果を問うとともに、その欠落を意識しつつもコレクションの潜在能力を再認識させる本展のような試みは、コロナ禍で運営の困難が今後さらに増大していくことが予想されるだけに各館で一度は行われるべきものであろう。ともあれ、西日本において町田市立国際版画美術館に比肩できる数少ない版画芸術の砦のひとつである和歌山県立近代美術館のさらなる版画コレクションの充実と活用の行方を楽しみに待ちたい[9]。

1｜恩地孝四郎『日本の現代版画』創元社、1953年；小野忠重『版画の歴史』東峰書房、1954年；同『版画：近代日本の自画像』岩波新書、1961年；同『近代日本の版画』三彩社、1971年、関野準一郎『版画を築いた人々：自伝的日本近代版画史』美術出版社、1976年など。

2｜展覧会では、「恩地孝四郎と『月映』」（東京国立近代美術館、担当：藤井久栄）1976年；「光と影のポエジー　日本近代銅版画展」（西宮市大谷記念美術館、担当：熊田司）；「日本銅版画史展」（東京都美術館、担当：河合晴生、松木寛）1982年、など。著作では、藤井久栄編『恩地孝四郎と「月映」』（近代の美術35）至文堂、1976年；福永重樹編『近代日本版画』（近代の美術40）至文堂、1977年；小倉忠夫・三木多聞編『日本の現代版画』講談社、1981年、など。

3｜この時期を扱った労作の展覧会シリーズとして西山純子氏が中心となって組織した千葉市美術館の一連の「日本の版画」展がある：「日本の版画Ⅰ　1901–1910　版のかたち百相」（1997）；「日本の版画　1911–1920　刻まれた「個」の競演」（1999）；「日本の版画　1921–1930　都市と女と光と影と」（2001）；「日本の版画Ⅳ　1931–1940　棟方志功登場」（2004）；「日本の版画Ⅴ　1941–1950　『日本の版画』とは何か」（2008）

4｜創作版画誌の全貌については、加治幸子氏の労作『創作版画誌の系譜：総目次及び作品図版：1905–1944年』（中央公論美術出版、2008年）を参照。

5｜「版画誌『エッチング』の功績」（坂本篤史／福島県立美術館）、「錦絵 FOR YOU 川端龍子、鶴田吾郎によるスケッチ倶楽部の版画」（宮本久宣／和歌山県立近代美術館）。

6｜例えば、下谷千尋《Earth Printing》（1973）、島州一《シーツとふとん》（1974）や小枝以外のマキシ・グラフィカの作家たち。本展図録は近現代版画史の通史としても類書を見ないものであるが、版画家養成の現場において「版画の特質と領域横断的なメディアとしての可能性を探る展覧会」として「多摩美の版画、50年」展（多摩美術大学美術館、2021年）が構想されたように、こうした側面が若干でも参考図版としてでも図録に紹介されればより完備したものになったことであろう。なお、和歌山版画ビエンナーレ展受賞作は本展に出品されたもの以外はやはり開館記念50年として開かれた「和歌山県立近代美術館　コレクションの50年」展に陳列された。この章を補足するエッセイとしては、「李禹煥の版画―近代と現代をめぐって」（荒木康子／福島県立美術館）が収録されている。現代版画について総括した文献は概説的なものを除けば未だ少なく、関西現代版画史編集委員会編『関西現代版画史』（美学出版、2007年）、松山龍雄『版画、「あいだ」の美術』（阿部出版、2017年）、あたりしか存在しない。現代版画をまとまった形で扱う展覧会としては、「プリンテッド・アート展　版画と写真の臨界点から」（山口県立美術館、1990年）、「マニエラの交叉点―版画と映像表現の現在」（町田市立国際版画美術館、1991年）、「現代版画の1970年代」（渋谷区立松濤美術館、1996年）など、1990年代にいくつか取り組まれているが、21世紀に入ってからはかなりまれになっている。

7｜例えば、「久保貞次郎と芸術家展：戦後初期版画を中心に」展（町田市立国際版画美術館、1993年）、「知られざる刷り師：女屋勘左衛門と日本のパントゥル・グラヴールたち：画家にして版画家」展（目黒区立美術館、1998年）、「版画の景色：現代版画センターの軌跡」展（埼玉県立近代美術館、2018年）。

8｜共同企画の福島県立美術館では、開館の1984年度に「現代版画の軌跡展」が、1986年度に「川上澄生版画展」が開かれた他、数度の斎藤清展に加え、「山中現展 夢の領域」展（2009年度）が近現代日本の版画展としては開催されている。

9｜展覧会カタログは和歌山県立近代美術館が創作版画展で多用しているハンディーでしゃれたデザインのもの（A5変形、デザイン：桑畑吉伸）。キャプション、巻頭のエッセイ2本、章解説が英訳され、海外への発信も意識されている点でも貴重な文献となることであろう。